

フランス語における職業名詞女性化の通時的記述 政治の分野の名詞を中心に

藤 村 逸 子

はじめに

フランスでは2002年6月17日に、総選挙後のラファラン第2次保守系内閣が発足し、10人の女の大臣、担当大臣、閣外大臣が誕生した¹⁾。新政府のメンバーを任命する公文書において、これらの職名はla ministre, la ministre déléguée, la secrétaire d'Etatのように、女性名詞として用いられている。つい5年前、1997年6月のジョスパン政権樹立時に、女の大臣が自らをla ministreと呼んだことが引き金となって始まった騒動はうそのようである²⁾。

ジョスパン前首相は、1998年3月に、男女平等を推進するための方策の一つとして、公文書における用語改革に着手することを通達した³⁾。それは、職業や肩書をあらわす名詞の文法的「性」を指示対象の自然の性に一致させることのできるようにフランス語を整備し、今後公文書では、女には女性名詞を使うようにと要請するものであった。2002年6月の新大臣の発表はこの方針に従っており、完全な女性化が達成されている。

しかし、公文書を除く様々な文書においては、彼女たちをあらわす名詞の「性」が一貫して女性名詞になっているわけではない。新聞・雑誌やインターネット上のフランス政府の公式サイトなど、公的な性格の文書でさえも、彼女たちを指す名詞の「性」にはあいかわらず様々なレベルでの揺れが見られ、常に女性名詞が用いられるとは限らない。男の大臣が例外なくle ministreと男性名詞で呼ばれ、男の大統領がいつもle présidentであることとの間には、大きなへだたりがある。

フランス政府の行った職業名詞の女性化政策は、確かに大きな成果を挙げたが、政策がなければ言語は変化しないのかということ、そういうわけではないし、一律に政策を実施しても、言語が一斉に変化するわけでもない⁴⁾。言語の変化は複数の、言語学および社会言語学的なファクターによって成り立っているからである。特に、本稿で問題にする語彙の文法変化は、それぞれの語彙項目ごとの条件が多様であり、また社会との関係も複雑であるために、一般化は容易ではない。したがって、本稿は、詳細な記述をその目的とする。政権の交替の時期にあたって資料の豊富な, ministre (大臣), secrétaire (大臣, 秘書, 書記等), député(e) (代議士), directeur/trice (支配人, 指導者など), président(e) (長), consieller/ère (助言者, 議員等)などの政治の分野で使われる職業名詞を取り上げて、職業名詞の女性化がフランスで話題になってから5年たった現在にいた

る言語の状況を通時的に記述し、言語変化をつかさどるファクターのいくつかを同定することを旨とする。

本稿では最初に、フランス語における職業名詞の女性化の特徴と、一般的な進展の仕方を紹介する。次に、政治分野のいくつかの名詞に関して、1970年代から今日に至る通時的変化を追う。資料としては、1988年から2001年までの、フランスで発行された新聞と雑誌の電子資料から得たデータと、1970年代より蓄積のある言語学者の文献資料を用いる。最後に、これまでの文献では指摘されることのあまりなかった点をまとめる。

なお、以下では「文法的性」を「性」、「自然の性」を性と記す。また「文法的性」の別を「男性」・「女性」、「自然の性」の別を男・女と表記する。

1. 女性化の定義：女性化とは脱男性化である

1.1. フランス語における女性化の特徴

フランス語においては、男女の職業の表され方に厳然とした非対称性があった⁵⁾。男は、語源に基づいたわずかな例外を除いて、いつも男性名詞で示されるのに対し、女をあらわす名詞の「性」には、さまざまなレベルでの不一致があった。伝統的に男が独占してきた職業の場合は、男性名詞のみがあって、女性名詞が存在しないことが多い。たとえば、大臣 (ministre), procureur (検事), charpentier (大工), chauffeur de taxi (タクシーの運転手)などがそうである。このような名詞では、女がこれらの職業についても、男性名詞で表されるのが常であった。また、男性名詞と女性名詞の両方が文法的にはそって存在していても、「性」によって意味が異なる場合もあった。典型例はsecrétaireである。secrétaireには、閣外大臣や書記長、党幹事など、社会的に高位の職名の意味と、タイプを打ったり手紙を書いたりするいわゆる「秘書」の意味とがあるが、女性名詞のla secrétaireはこれまで「秘書」の意味しか持たなかった⁶⁾。男性名詞のle secrétaireは、指示対象が男でありさえすれば、どのような種類のsecrétaireに対しても用いることができるのに対し、指示対象が女の場合には、男性名詞のsecrétaireと女性名詞のsecrétaireを使い分けなければならない、社会階級の上下と名詞の「性」が相関する結果を生むことが問題とされてきた。政府の女性化政策はこの状況を改めて、職種を問わず女にはいつも女性名詞を使うようにすることを目的としている。すなわち、指示対象の自然の性が明らかである限りにおいて、名詞の「性」は人の自然性に一致させるとするのがその方針であり、フランス語の名詞の「性」のシステムを根底から作り変える可能性もあると考えられる⁷⁾。

語用論的には、別の言い方も可能である。フランス語の名詞の「性」は、いつも明示的に表示されるとは限らないので、男に対するのと同じ条件を女にも実現するためには

まずは、「明示的な男性名詞は女に対して使わない」ことだけで十分である。指示対象が男の場合にも、「男性」か「女性」かの不明な名詞が使われることはよくあるからである。

フランス語の名詞の「性」は、(1)形容詞や過去分詞による一致、(2)冠詞などの限定詞、(3)語形によって表示されうるが、名詞に冠詞や形容詞のつかない場合があることは言うまでもない。また、フランス語では男女同形の名詞の割合は高く、Khaznadar (2000)によると、ministreのような完全な男女同形名詞(épïcène)は29%、député(e)のようなスペルのみ男女異形で発音は同形の名詞は6%存在する。ministreやsecrétaireに冠詞も形容詞もつかなければ、それが男性名詞なのか女性名詞なのかの判断はつかない。顕示的な男性名詞を避けて、「性」不明の表現を用いるための方法は色々ある⁸⁾。男性名詞の使用をやめるとただちに、女性名詞を使用しなければならなくなるというわけではないのである。

1.2. 女性化の進み方

男性名詞としてのみ用いられてきた名詞の女性化はおおよそ、次の道筋をたどって進む。

まず始めに、脱男性化の傾向があらわれ、女に対して、明示的な男性名詞を使うことが少なくなる。たとえば現在、médecin(医師)、maire(市長)、professeur(先生)などの名詞には、「男性」の冠詞や形容詞の付与を避ける傾向のあることが観察できる。

第2段階では、語形は変わらないまま、形容詞の女性形の使用が増えてくる。例文(1)では、ministreが「女性」の形容詞とともに用いられている。しかし、1995年当時、この語に「女性」の冠詞がつくことはほとんどなかった。

- (1) Ségolène Royal l'adore depuis que, ministre enceinte jusqu'aux yeux, il lui a "interdit" de se lever pour parler. (Libération, 1995/5) (見た目にも妊娠中の[女性]大臣だとわかるようになったSRが立って発言することを彼が禁止して以来、SRは彼が大好きだ。)

第3段階では、例文(2)のように「女性」の冠詞が出現するようになる。

- (2) Pour riposter à la publication du témoignage de Véronique Vasseur, la médecin-chef de la maison d'arrêt parisienne, ... (Le Monde, 2000/01-02) (パリの刑務所の主任医師[女性]のVVの出版物に反論するために...)

最後に、男性形とは別の「女性」の語形が可能な場合には、例文(3)のように女性形が使われるようになり、それが定着していく。

- (3) Avec l'ex-dictateur incarcéré et inculpé, la procureure, Carla Del Ponte, n'est pas au bout de ses peines. (Le Monde: 2001/11/25) (捕まえられた元独裁者と共について、検事[女性]のCDPは...)

揺れのある名詞の中で女性化の完了に最も近いのは例文(4)のprésidenteである。

présidenteは女性形が言うまでもなく確定しており，女が指示対象であれば，ほとんど例外なく使用される。

- (4) Edith Cresson, ancien premier ministre et présidente de l'association pour les écoles de la 2e chance a inauguré cette école hier à Mulhouse. (DNA2000) (元首相〔男性〕で，再出発のための学校の会の会長〔女性〕のECは...)

secrétaireやprésidenteなどの，すでに女性名詞が定着している名詞の女性化は職種を問わず全ての女への拡大ということになるが，その過程にも言語学的な秩序がないわけではない。たとえば，ministreは現段階で女性化がかなり進んでいるが，例文(4)からわかるように，premier ministre(首相)はその例外である。「首相」が女性化(=脱男性化)しにくい理由は，女の首相は稀という社会的要因が決定的なのではなくて，最上級に準じた形容詞premier(最初の)が，男女を含んだ包括的な男性名詞を要求するためと考えられる⁹⁾。同様に，président(e)にもpremierが付くと，圧倒的に男性名詞のpremier présidentが用いられ，première présidenteは稀である。

2. 「性」の通時的变化(2001年12月まで)

さてそれではministre, secrétaire, député(e), directeur/trice, président(e), conseiller/èreの各語彙項目が，現実にどんな風にその文法的「性」を変化させてきたかを観察することにしよう。

2.1. データ

資料として用いたのは，以下の新聞と雑誌の電子テキストであり，元データの総語数は約5700万語である。入手方法は，1) ELRA (European Languages Resources Association) よりの配布，2) CEDROM-SNiからの製品版CD-ROM，3) ホームページからのダウンロードの各方法による。使用した資料の発行年月は次のとおりである。

- Le Monde: 1988-01/02 (ELRA), 1994-01/02 (ELRA), 1997-01/02 (CEDROM-SNi), 1998-01/02 (CEDROM-SNi), 2000-01/02 (ELRA), 2001-11/12 (<http://www.lemonde.fr>)，中央紙
- Libération: 1995-01/02, 1999-11/12, CEDROM-SNi，中央紙
- Le Point: 1995, 2000, CEDROM-SNi，週刊誌
- Dernières Nouvelles d'Alsace: 1996-01/02, 2000-09/10，<http://www.dna.fr/dna/>，地方紙(アルザス)
- Le Télégramme: 1996-05, 2000-10，<http://www.letelegramme.com/>，地方紙(ブルターニュ)

データの処理は次のように行った。女を指す職業名詞のみを抽出する目的のために，

まず、JeanneやCatherineなどの頻度の高い女性名(約200)を選んで上の資料を検索し、コンテキストつきの女性名からなる「女性名コーパス」(約11万例)を作った。次に、「女性名コーパス」において職業名詞を機械的に検索し、さらに手作業による修正を行って、女を指す職業名詞のみからなる約7000例を抽出した。

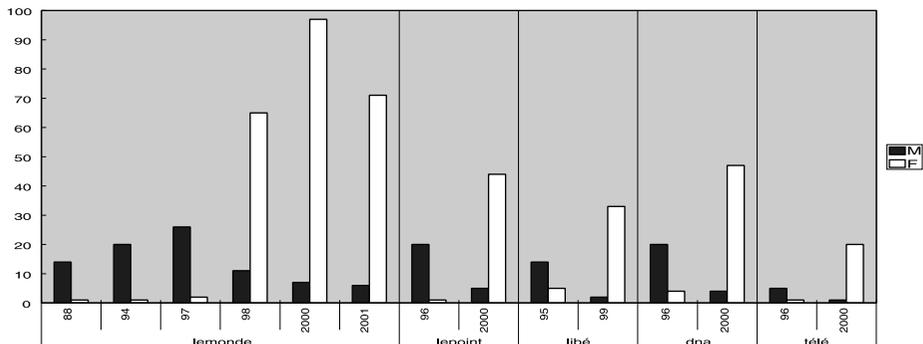
文献的資料としては、Boel(1976)とYaguello(1989)をメインとする言語学者の研究を参照した。Boel(1976)は、1970年から1973年までの新聞雑誌とテレビの調査に基づいた記述である。Yaguello(1989)は、データベースFrantextに基づくと記されているが、むしろ、この分野の第一人者である著者の直感に基づいた語彙集の感が強い。

繰り返しになるが、以下では、女を指示する名詞のみが観察の対象である。問題の所在は、女に対して男性名詞を用いることにあるので、以下ではとくに男性名詞のふるまいに着目する必要がある。

2.2. Ministre

グラフ1は、女の大臣が指示対象の場合の、ministreの「性」の変化を示している¹⁰⁾。Le Mondeのデータからはっきりわかるように、ministreの文法的「性」は、1997年と1998年の間で大きく変化した。1997年以前は女の大臣に対して男性名詞を用いるのが普通であったが、1998年以降、ministreは男女同形名詞(=épiciène)に変化し、女に対しては女性名詞として使用されるようになった。変化は劇的であり、一見したところその原因はジョスパン政府が推し進めた女性化政策にあると考えられよう¹¹⁾。

グラフ1：大臣 (le ministre / la ministre)¹²⁾



しかし、Le Mondeで調査対象としたのは各年それぞれ2ヶ月分である。1998年というのは、実際には1998年の1・2月である。つまりLe Mondeは1998年1・2月の段階ですすでに、2000年以降と変わらない規模の女性化をministreに関して行っていた。政府が正式な形で女性化促進の通達を出したのは、1998年3月6日である。政府の要請によって、女性

化促進のためのガイドラインをINaLF（国立フランス語研究所）が出したのは、更に遅れて1999年の後半のことである。もちろん、政府は唐突に通達を出したのではない。1997年6月のジョスパン政権樹立以降、女性化問題はマスメディアに盛んに取り上げられた¹³⁾。アカデミー・フランセーズの反対声名が発表され、推進派の意見表明も盛り上がった。しかし、権力機構としての政府が政策としての女性化を打ち出したのは、1998年春になってからである。つまり、Le Monde紙がla ministreを用い始めたのは、自由裁量に基づいてのことであり、政府が打ち出そうと準備中の政策に支持を表明する意図があったといってよいだろう¹⁴⁾。

他の新聞・雑誌は、細かな動きはわからないが、いずれにせよ、1998年ごろを境にして、極めて大きな変化が起こったということに疑う余地はない。

1998年以後も男性名詞のまま用いられている例には、premier ministreとancien ministreが目立つが、特別な理由のない場合もかなりあり、保守的な使い方を維持しているに過ぎないと思われる例が多い。

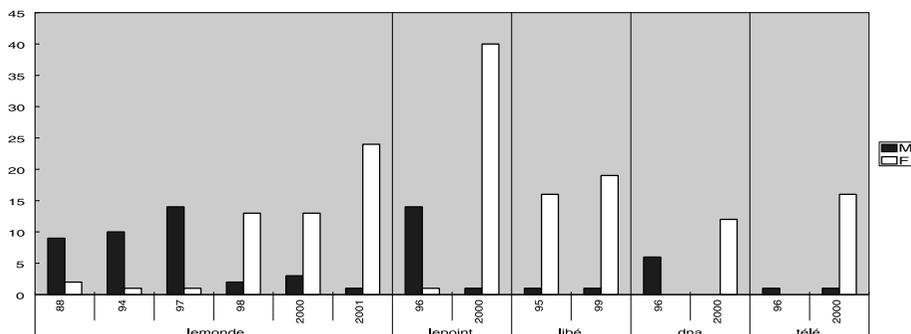
Boel(1976)は、ministreについて、女性名詞として用いられるのは極めて稀であると記している。Yaguello(1989)は、la ministreは可能であろうが、なかなか使われるようにならないと述べている。Khaznadar(1993)は、1990年から1992年のマスメディアの観察から、女に対して男性名詞のministreを用いることが引き起こす文法上、伝達上の様々なトラブルを伝えている。

2.3. 国会・EU議会議員（député/députée）

次に、député / députéeのグラフを見る。この名詞は語形が「男性」「女性」で異なるため、「性」は語形のみによって判定できる。

Le Mondeでは、ministreと同様に、98年を境にした激しい変化を観察することができる。Libérationでは、ministreの場合とは違って、1995年の時点から女性名詞のdéputéeが圧倒

グラフ2：国会・EU議会議員（député/députée）



的に多数用いられている。全般にministreよりも変化は徹底的で、DNAのように100%、名詞の「性」が入れ替わった新聞も存在する。革新的なLibérationにおいて、1999年に男性名詞が用いられているのは、次の1例でのみある。この例のdéputéは、個人ではなく、職名そのものを指示していることが明らかであるため、男性名詞の使用が容易に説明ができそうな例ではあるが、実際には、同種の例において女性名詞が用いられることは決して稀ではない¹⁵⁾。

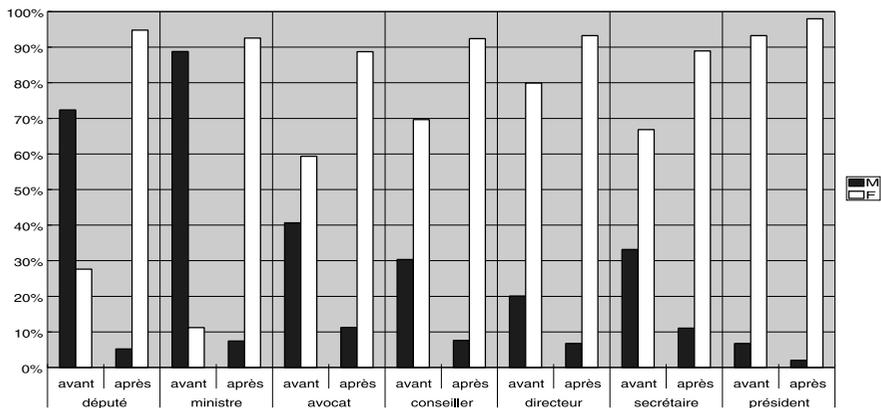
- (5) Après mûre réflexion, DSK a pourtant renoncé à exiger la démission de Raymonde Le Texier, sa suppléante au siège de député du Val-d'Oise. (Libération, 1999/12) (よく考えた後、DSKはバルドワーズの代議士〔男性〕の職に彼の補欠〔女性〕としてついているRLTに対して辞職を要求することをあきらめた。)

député / députéeは、語源的に、動詞députerの過去分詞ではない。女性名詞の語形形成に抵抗があった理由の一つはここにあると考えられる。しかし、それにしてもこの極端な変化の原因は一体何なのだろうか¹⁶⁾。すでに1949年にS. Stehli¹⁷⁾はdéputéeの使用の広まりを予言していたとBoel(1976)は述べている。ただし、1976ごろにこの女性名詞の使用はほとんどなかったらしい。EU議会において近年、女の代議士が多数誕生したことと関係があるのかもしれない。

2.4. 1998年の前と後

グラフ3は、女を指示するdéputé(e), ministre, avocat(e)〔弁護士〕, conseiller/ère, directeur/ice, secrétaire, président(e)の女性化の推移の様子を、1998年より前(=avant)の使用か後(=après)の使用かという点のみを基準にまとめたものである。男性名詞と女性名詞の割合を百分率で表してある¹⁸⁾。

グラフ3：1998年の前と後



まず何よりも, *ministre* と *député(e)* の変化の激しさが再確認できる。この二つの名詞は, 1998 年を境に完全な逆転が起こった。

他の名詞は 1998 年以前においてすでに, 女性名詞が過半数を超えて使用されている。1998 年より後になると, どの名詞も女性名詞の割合が 9 割を超えるに至る変化を示している。ここに挙げた名詞に限れば, 女を指して男性名詞を用いることは今では例外的と
いってよいだろう。

2. 4. 1 *président / présidente*

先にも触れたが, 特に *président(e)* は女性化が進んでおり, 1998 年より後では, 女性名詞の割合は 98% に達する。わずかに残った男性名詞の中には, *président de la République* (大統領) や, *président-directeur-général* (社長), *président de la cour d'appel* (裁判長) などの高い地位の職名もあるが, 他は, *président du jury du fleurissement* (花いっぱい審査委員長), *de l'association* (会長), *du club* (クラブ長) などの平凡な職名も含まれて一貫性はなく, 完全な女性化の前の最後の揺れの段階に差し掛かっているものと考えられる。

2002 年の新内閣で防衛大臣となった Michèle Alliot-Mairie は, 1999 年に RPR の党首になった際に, *Madame le président* という呼称を好むと発言したことが知られているが¹⁹⁾, 本稿のコーパスの中には, 彼女が *président* と男性名詞で表現されている例は, 次のように引用符でマークされた特殊用法しか存在しない。この 2 例を除く 97 例はすべて *présidente* である。

- (6) Si la députée-maire de Saint-Jean-de-Luz devient maintenant “Madame le président” (c’est elle qui tient à cette appellation comique), elle ne le doit qu’à ses propres mérites. (Libération, 99/11-12) (もしも Saint-Jean-de-Luz の代議士兼市長〔女性〕が, 「党首〔男性〕殿」になったら …)
- (7) Le RPR et Michèle Alliot-Marie, «son président», se sont associés dans un communiqué publié vendredi 31 décembre, aux «vœux chaleureux et confiants» du président de la République. (Le Monde, 2000/01) (RPR と「その党首〔男性〕」の M.A-M は, 協力した…)

Libération 紙は (6) のように, *Madame le président* という言い方を滑稽だと評している。Yaguello (1989) は, 大学の学長は一般に *Madame le président* と呼ばれることが多いと言っているが, 他方, Boel (1976) は, 社会的地位が極めて高い職業名をあらわす場合にも女性名詞が用いられることが多い点で *président(e)* は特殊だと述べている。1970 年台初めのメディアですでに, *président(e) au Conseil de Paris* (パリ市議会議長), *vice-président(e) du Sénat* (上院議会議長) などが, ほぼ半数は女性名詞で表示されていたということである²⁰⁾。現在では, グラフ 5 に見るように, 欧州議会議長 (*président(e) du Parlement Européen*) も,

地方議会議長(*président(e) du conseil régional*)も例外なく女性名詞で表されるに到っている。

2.4.2 *secrétaire*

すでに述べたように、女の*secrétaire*には、*le secrétaire*と*la secrétaire*というはっきり区別された2つのカテゴリーがあった。Yaguello(1989)は、*secrétaire d'Etat*, *secrétaire d'ambassade*, *secrétaire général*などの、かつては男が独占していた社会的地位の高い職名は、例外なく男性名詞で表されると記している。

グラフ3を見ると、女性名詞の*secrétaire*が近年増加したことは一目瞭然ではあるが、グラフ3の結果からだけでは、「女の職業」としての秘書の仕事をする女が、新聞や雑誌に最近よく登場するようになったのか、それとも以前の*le secrétaire*が*la secrétaire*と名称を変えたのかは不明である。そこで社会的地位の高い*secrétaire*の固有名を手がかりに、個人のあらし方がどんな風に変ったかを調べたのがグラフ4である。横軸には、1998より前(=avant)と後(=après)の2つの時期に分けて、固有名詞が並んでいる。縦軸は「男性」と「女性」の*secrétaire*の出現回数である。

グラフ4を観察すると、1998年以前には、労働組合書記長のNicole Notatを除くほぼ全員が男性名詞の*secrétaire*で表されていることがわかる。1998年をすぎると、アメリカの国務長官のMadeleine Albrightとアカデミー・フランセーズの終身幹事のHélène Carrère d'Encausseを除く全員が女性名詞の*secrétaire*に変化し、Madeleine Albrightにしても、女性名詞での表示の方が増えている。*secrétaire*もYaguelloの記述の時点と比べると明らかな大きな変化を受けたと言ってよい。本稿のデータにおいては、1998年より後に出現する男性名詞の*secrétaire*のほとんどは、このMadeleine AlbrightとHélène Carrère d'Encausseの二人である。

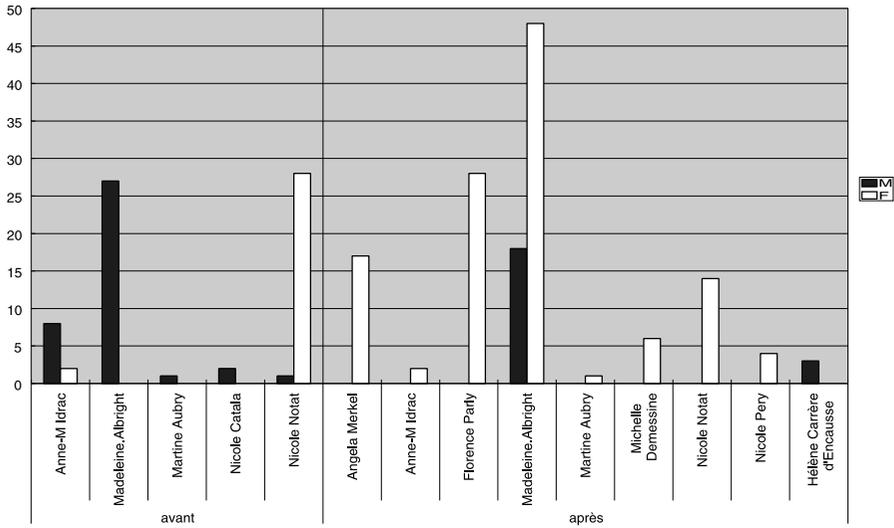
2.4.3 *directeur / directrice*

*directeur / directrice*に関しても、他と同様、女性名詞の使用が増えていることはグラフ3が示すとおりである。*directeur/directrice*と呼ばれる具体的な職業は様々である。グラフ5は、そのうちのいくつかを取り上げたものである。

社長は、男性名詞でしか用いられないと言われてきた(Boel(1976), Yaguello(1989))。しかし、女性名詞の社長、*présidente-directrice-générale*や*la PDG*が、次のように現れ始めている。

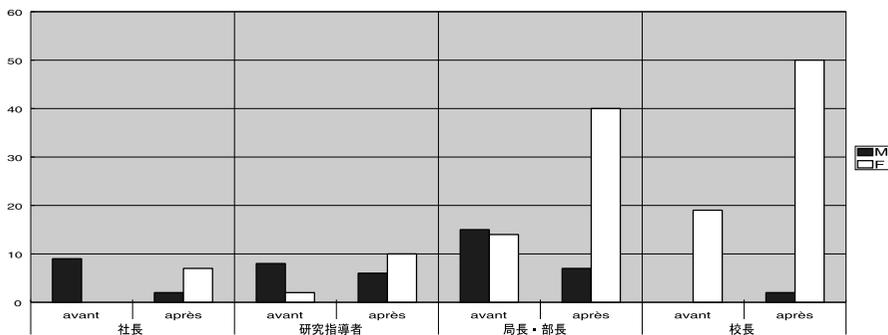
- (8) Jacqueline Vaudois, ancienne présidente-directrice-générale de la société; .. (Le Monde, 2000/1-2) (元社長[女性]のJV)
- (9) XEROX: la PDG du groupe de bureautique américain, Anne Mulcahy, s'est déclarée, lundi 19 novembre, à "100% confiante" dans la capacité de sa compagnie à revenir à "la santé

グラフ4：secrétaireたち



- secrétaire d'Etat(閣外大臣): Anne-Marie Idrac, Nicole Catala, Florence Parly, Nicola Pery, Michelle Demessine
- secrétaire d'Etat(アメリカ国務長官): Madeleine Albright
- premier secrétaire de la fédération de Pas-De-Calais(社会党第一地方書記): Martine Aubry
- secrétaire nationale du PS(社会党全国書記): Martine Aubry
- secrétaire général(e) de la CFDT(民主労働同盟書記長): Nicole Notat
- secrétaire générale de la CDU(ドイツCDU党首): Angela Merkel
- secrétaire perpétuel de l'Académie Française(アカデミー・フランセーズ終身幹事): Hélène Carrère d'Encausse

グラフ5：directeur / directrice



- 社長：président-directeur-général, présidente-directrice-générale, PDG
- 研究指導者：directeur/directrice de recherche
- 局長・部長：directeur général /directrice générale
- 校長：directrice de l'école

financière” (Le Monde 2001/11-12) (ゼロックス：アメリカの事務機器グループ社長〔女性〕のAMは宣言した...)

局長や部長を意味する *directeur général / directrice générale* も従来は、男性名詞が多いと言われていたが、98年以降は、圧倒的に女性名詞が優位に立っている。

面白いのは、校長 *directrice d'école* である。この職業は以前から女が就くことの多い職業であり、言語上の女性化も進んでいたが、低年齢の子供の学校の校長は女性名詞であらわれ、上級の学校の校長は男性名詞で呼ばれる傾向のあることが観察されていた²¹⁾。

しかし本研究のコーパスにおいては、最も古い1988年のLe Monde以来、男性名詞の校長は現れず、女性名詞のみが見られる。*directrice de la maternelle*(幼稚園の園長)から始まり、*directrice du collège*(中学校長)、*directrice du lycée*(高校長)、*directrice de l'école de sages-femmes de Grenoble*(グルノーブル助産婦学校長)、*directrice de l'Ecole normale supérieure de Sèvres*(セーブル高等師範学校長)に至るまで全てそうである。

(10) Parfois, les parents tiennent à ce qu'elles gagnent leur vie plus vite que les garçons, en particulier dans les sections techniques, comme l'explique Mme Josiane Serre, directrice de l'Ecole normale supérieure de Sèvres. (Le Monde, 1988/01-02)

ところが、2000年になって、我々のコーパスでは初めての男性名詞の校長が現れた。それは、歴代大統領を始め、多数の国家の指導者を輩出してきたENA(Ecole Nationale d'Administration)の、史上初の女の校長を指示するために用いられた男性名詞であった。

(11) Nouveau directeur de l'ENA, Marie-Françoise Bechtel s'est installée pour la première fois dans son fauteuil hier à Strasbourg. (DNA, 2000/01-02)

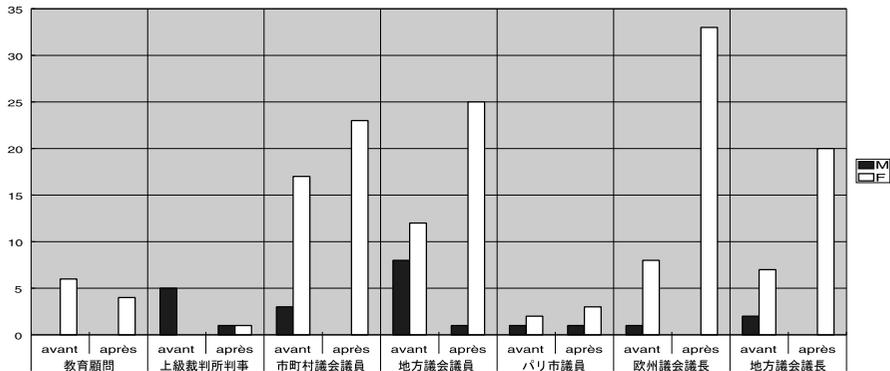
フランス語では、男に独占されてきた職業に女が初めて就いた際に、名詞の「性」を指示対象の性にあわせて即座に変えるということは通常は起こらない²²⁾。指示対象の性別が変わっても、従来から使われてきた男性名詞を使用し続けるというのが普通である。しかし、同じく史上初ながら、2002年に始めて任命された女の防衛大臣に対しては、*la ministre de la Défense* が、Le Figaro以外のメディアではほぼ例外なく使われている。「性」の問題に関して現在のフランスのマスメディアが敏感に反応する「派手な」職業と、そうでない「地味な」職業とがあるのだろうか²³⁾。

2.4.4 conseiller / conseillère

最後に、*conseiller / conseillère* を見る。この名詞も様々な職業を指して用いられる。グラフ6はそのうちのいくつかを取り上げたものである。

教育顧問が全て女性名詞であるのに対し、上級裁判所判事を意味する *conseiller/ère à la Cour d'appel* や、*conseiller/ère à la Cour de cassation* に、男性名詞が多いことは、これまでに言われてきたように、社会と関連していると考えてよいだろう。議員の中では、パリ

グラフ6 : conseiller / conseillère, président / présidente



- 教育顧問 : conseiller/conseillère pédagogique
- 上級裁判所判事 : conseiller/conseillère à la cour
- 市町村議会議員 : conseiller municipal / conseillère municipale
- 地方議会議員 : conseiller général, régional / conseillère générale, régionale
- パリ市議会議員 : conseiller parisien / conseillère parisienne
- 欧州議会議長 : président/présidente du Parlement Européen
- 地方議会議長 : président/présidente du conseil régional

市議員が最も保守的に見える。現在でもなお、例(12)のように、男性名詞の conseiller parisien が見られる。この例は、Le Point の記事の中に職名の誤りがあったことを申し立てた文であり、申し立てた本人の肩書きと名前が最後に記されている。フランス政府は公的な職名の女性化を終えたが、パリ市の正式の職名は未だに変わっていないということなのか。

(12) Je suis en effet premier adjoint depuis 1995 et, qui plus est, chargée du Commerce depuis 1989. Jeanne CHABAUD Conseiller de Paris Premier adjoint au maire du 15^e. (Le Point, 2000) (私は、まさしく1995年以来助役〔男性〕であり、さらに1989年からは、商工問題の担当者〔女性〕でもあります。パリ議会議員〔男性〕, 15区第1助役〔男性〕 J.CH)

パリ以外の市町村議会議員は、本研究のコーパスにおいては1998年以降、100パーセントの女性化を達成している。グラフ6には、議長を意味する président / présidente も併記したが、議長の方が、議員よりも女性化の達成度は高い。男に独占されがちな職業名ほど男性名詞が多いとは必ずしも言えず、この差異は名詞の言語学的な特質に理由があると考えられる。

3. まとめ

以上から明らかなことは、なによりもまず、本稿で取り上げた名詞は全て、女性化が極めてスムーズに進んでいるということである。

これまでに女性化を阻止するファクターとして指摘されてきたものに、形態論的ファクターとしての語形の問題があったが、la ministreも députéeもその問題を短期間に難なくクリアした。フランス語では、名詞の女性化は文法的な形態変化の問題ではなく、新語形成の問題と考えるべきである。形容詞の女性形には生産性があるのに対して、女性名詞は語彙項目として新たに辞書に登録されなければならない。政府の政策のような強制力のある手段や、新聞紙上での論争が引き起こした一種の流行語現象が、一連の新語形成には必要だったと考えられる。

社会的地位と男性名詞・女性名詞の関係に関しては、フェミニズムの立場を初めとして非常に多くの指摘がなされている²⁴⁾。言語は社会の構造を反映するシステムであるから、男のみが高い地位の職業に就いてきたという現実社会の歴史が、高い地位の職名はいつも男性名詞で表示されるという言語的事象として、secrétaireなどの名詞に残存していたとしても不思議ではない。本稿で取り上げた名詞は高い地位の職業名ばかりであったために、今回、この点を再確認することになったが、男性名詞と女性名詞の対立一般に、このような意味の違いが付随しているということではないであろう。肉体労働の職人を表す名詞の多くに女性名詞が存在しないことは、社会的地位の観点からは説明できない。また、professeurの場合に、大学教授はいつも男性名詞だが、中学の先生は女性名詞というようなこともない。

secrétaireや directeur/riceや président(e)において、地位と「性」に相関のあった一番の理由、また ministreがいつも男性名詞であったもっとも大きな理由は、規約や任命などの公の文書に「男性」の職名が記載されていたためと考えられる。公文書の言葉遣いが、一般の言葉遣いにどれほどの影響を与えるのかは不明ではあるが、secrétaire d'Etat「閣外大臣」などの特殊な肩書きは、日常的に多用されるわけではないであろうから、公文書通りの「性」をメディアは用い、それが定着していたのではないと思われる。

ジョスパンの言語政策ののち状況は逆転して、現在では、公文書が最も先進的で革新的な女性化のモデルを示すことになった²⁵⁾。公的な表現が、日常の表現にどんな影響を与えるのかという問題は逆の方向から考えなければならなくなった。本稿で取り上げた政治の分野の職業名に関しては、ほとんどのメディアの賛同も得て、この方向が定着していくものと見える。

女性化の進展に影響する他のファクターとしては、次のものを挙げることができる。社会の問題としては、職業にしめる女の割合、伝統的職業が近代的職業かなど、言語の

問題としては、語の古さ、基礎語彙かそうでないか、本来的な職業名詞なのか、別の意味を持つ語の拡張なのかなど、社会と言語の両方に関するものとしては、名詞の指示対象となる人間の発言力、語が所属する分野や使用域、分野や使用域を管理する言語的権力者の意識などである。これらについては、稿を改めて検討を続けることにしたい。

[注]

1. その中でも、前のRPRの党首（présidente du RPR）で、フランス史上初の女の防衛大臣（la ministre de la Défense）のMichèle Alliot-Marieと、ヨーロッパ連合で初めての女の宇宙飛行士（la spationaute）で今回、研究・新技術担当大臣（ministre déléguée à la Recherche et aux Nouvelles Technologies）になったClaudie Haigneréに関する報道はにぎやかである。
2. J.O. 140 (2000/6/18): Décret du 17 juin 2002とJ.O. 129 (1997/6/5): Décret du 4 juin 1997を比較するとよくわかる。
3. 男女平等と女性化政策との関係については、様々な文献で述べられている。藤田・藤村(2002)の文献案内を参照のこと。
4. 言語政策の権力を誰が握っているのかという問題もここに付け加わって、話は複雑である。政府の指示によって、国立フランス語研究所（INaLF）は、1999年下半期に職業名詞の女性化のガイドブック「Femme, j'écris ton nom」を出し、職業・肩書名詞の女性形の作り方を提案し発表した。それより前の1998年10月には、アカデミー・フランセーズの当時の終身幹事Maurice Druonが中心となって、政府の用語・新語審議会が報告書をまとめ、公文書では肩書や職名は女性名詞を使わず、男性名詞のままの方がよいという結論を出したが、政府の方針は女性化推進であり、報告書は無視される形に終わった。アカデミー・フランセーズは政府の方針に反対し、公文書が、INaLFのガイドブックに基づいた用語を用いることに対して、非難を表明し続けている（Le Monde: 2000/5/31, Le Figaro: 2000/5/27, 2002/3/23）。また他に、新聞・テレビなどのマスメディアの影響も大きい。マスメディアが政府の政策を支持するかどうかは、言語変化が進むかどうかの鍵になると考えられる。Le Figaroは、政府の政策に反対の立場を言語使用の実際において表明し続けている。
5. 名詞に「性」のある言語には、全て同じようにこの特徴があるわけではない。スペイン語では、人を表す名詞の性が指示対象の性に一致することはほとんど自動的である。違いは言語の構造に由来すると考えられる。またフランス語に限っても、カナダのケベック州、ベルギー、スイスでは女性化政策は、フランスより早く進められている。藤村・糸魚川(2001)を参照のこと。
6. ただし、後のグラフ4で見ると、民主労働同盟書記長のN. Notatはずっとla secrétaireである。
7. これが可能かどうかということは、ここでは取り上げない言語学的な別の問題として残る。筆者は、「性」のシステムの崩壊につながる可能性もあると考えている。
8. たとえば、docteurを避けて、titulaire d'un Doctoratとするなど。
9. しかし、スペイン語では女の首相は、primera ministraである。
10. 「性」の認定は、冠詞と形容詞の一致と語形による。
11. 女性化政策の詳細に関しては、藤村・糸魚川(2001)を参照のこと。
12. M（黒棒）は男性名詞、F（白棒）は女性名詞。縦軸は出現回数を表す。横軸は、左からLe

Monde (88年, 94年, 97年, 98年, 2000年, 20001年), Le Point (96年, 2000年), Libération (95年, 99年), Dernières Nouvelles d'Alsace (96年, 2000年), Le Télégramme (96年, 2000年) である。グラフ2も同様。

13. 前の法務大臣のElisabeth Guigouは, Madame la ministre, あるいはMadame la Garde des Sceauxという女性化した呼称以外には返答しなかったという。(cf. Brick & Wilks (2002), p.48)
14. 逆にLe Figaroは, ministreを頑固に男性名詞のまま扱う極端な新聞である(cf. Yaguello (1998), 石丸(2001))。石丸によると, Le Figaroでは1999年5月 - 7月の期間になってさえも, 女性名詞のministreは一例も見つかっていない。ただし, 政府の政策としての女性化にしても, 公文書における強制以外の強制力はない。今後, 教育の場で, どのような展開を見せるのかが興味深いところである。
15. 職業(= 役割) を指示するなら男性名詞, 個人(= 値) を指示する場合は自然の性に合わせるという原則が, 様々な文脈で指摘されているが, それが守られているようにはとても思えない。役割と値の境界がそれほど明確でないためなのだろうと考えられる。この興味深い問題については稿をあらためて再び論じたい。
16. 最近の日本でもこのような激しい変化を, 体験することができた。保健師助産婦看護婦法が, 保健師助産師看護師法に変わった(改正: 2001/12/12、施行: 2002/3/1)のに伴って, 新聞などは一斉に, 看護婦という表記をやめ, 看護師に変えた。
17. Walther Stehli: *Die Femininbildung von Personenbezeichnungen im neuesten Französisch.*
18. Le Mondeの1998年1月2月のデータは, このグラフからは除いてある。
19. Michèle Alliot-Marieは, 女性化反対論者である。「VOLONTIERS traditionaliste, elle est hostile à la féminisation des titres. "Le" député des Pyrénées-Atlantiques préférera donc être appelé "madame "LE" président".» («Madame 'LE' président», Le Monde 1999/12/7)
20. Elue à la Présidence du Bundestag... L'aile gauche a tenté de s'opposer à ce qu'elle accède poste de présidente du Parlement. (Le Figaro, 14-12-72), Il s'agit de Mme Devaud, ancienne vice-présidente du Sénat, titulaire de très officielles fonctions au Conseil économique et social...(Le Figaro, 19-3-71)などのように, Le Figaroにも女性名詞が見られる(Boel (1976) p.59)。
21. Une femme pourrait être directrice d'école primaire, mais pas directrice des lycées et collèges au ministère de l'Education, ... (Rousseau (1998))
22. スペイン語では, 指示対象の性にあわせて, 冠詞が変わることは自動的におこり, それにあわせて, 名詞の語形も女性形になる経緯に関しては, 藤村・糸魚川(2001)で詳しく説明した。
23. しかし反例は存在する。世界初の女の宇宙飛行士テレシコワの初飛行を伝えるLe Monde (1963.6.18)は, 彼女をla nouvelle cosmonauteと女性名詞で表わしている。伝統的な職業, および古くから存在する名詞であるほど, 女性化は進みにくいのではないだろうか。
24. 藤田(1990)にも触れられている。
25. Légion d'honneur 勲章の受勲者名簿の発表 J.O. 97 (2000/4/23)と, それに対するアカデミー・フランセーズの批判(Le Monde 2000/5/31, Le Figaro 2000/5/27)を参照のこと。

[参考文献]

Becquer, A., B. Cerquiglini et alii. (1999): *Femme, j'écris ton nom: guide d'aide à la féminisation des noms de métiers, titres, grades et fonctions*, La Documentation Française.

- Boel, E. (1976), “Le genre des noms désignant les professions et les situations féminines en français moderne”, *Revue Romane* 11, pp.16–73.
- Brick, N. & Cl. Wilks (2002): “Les partis politiques et la féminisation des noms de métiers”, *French Language Studies* 12, p.43–53.
- 藤村逸子, 糸魚川美樹 (2001): 「フランス語における職業名詞の女性化 カスティーリャ語との比較」, 『言語文化論集』(名古屋大学言語文化部) 23-1, pp.141 - 56 .
- 藤田知子 (1990): 「言語と性差 フランス語名詞の「性」(genre)について」, 『異文化コミュニケーション研究』3, p.1 - 21.
- 藤田知子、藤村逸子(2002): 「文献案内: ジェンダーと言語研究」『フランス語学研究』36, p.53 - 67.
- 石丸久美子 (2001): 「フランス語における職業・役職名詞の女性形化についての考察」, 『大阪大学言語文化学』10, p.75 - 87.
- Khaznadar, E. (1993): “Pour une première; La dénomination de la femme dans l’actualité, Dichotomie, affixation et alternance”, *Cahiers de lexicologie*, 63-2, pp.143–69.
- Khaznadar, E. (2000): “Masculin et féminin dans la dénomination humaine: linguistique et politique – Aperçu de la pratique québécoise ” *Le français moderne* LXVIII-2, pp.141–70.
- Rousseau, J (1998): *Madame la Ministre : La féminisation des noms en 10 questions*, CIEP.
- Yaguello, M. (1989): *Le sexe des mots*, Belfond.
- Yaguello, M. (1998): “Madame la ministre”, in *Petits faits de la langue*, Le Seuil, p.118–139.